

尾道市持光寺所蔵釈迦八相図について(四)

関 口 正 之

二 主 題 (承前)

持光寺蔵釈迦八相図八幅の主題は前稿(31号)までに比定し得たが、さらに第一幅と第四幅に描かれた二点について補足する。

先ず第一幅(託胎)においては、画面下半に表わされた華やかな行列の主題を、麻耶夫人の「有娠」を祝う「朝賀」の人々であると仮定しておいた。この部分が王宮に向う慶賀の列と見なしても絵画表現としては矛盾は認められないが、⁽¹⁾經典の記述が具体的ではないことや持光寺本以外に類似の表現が見当たらないことから「朝賀」と断定することは躊躇された。むしろ、松本栄一博士が敦煌の幡画仏伝図の主題の一つとして言及された「麻耶夫人出遊」⁽²⁾を絵画化したものと考えて方が、この場面の細部に一致する部分が多い。「麻耶夫人出遊」は麻耶夫人が太子の誕生する藍毘尼園に出かけたときの出遊を指すもので、「託胎」と「降誕」の間に位置する主題である。「麻耶夫人出遊」の典拠として松本博士は『過去現在因果経』巻第一の一節を指摘された。この個所をはじめ二、三の經典には宝車あるいは宝輦に乗る麻耶夫人が象兵をはじめ百官の行

列を従えて藍毘尼園に出かけたことが記される。その個所を資料二四として補った。『過去現在因果経』巻第一に対応する絵因果経は現在伝わらないので「麻耶夫人出遊」の部分が絵画化されていたとしたら如何に表現されていたかを知ることができない。松本博士が指摘したこの主題の敦煌の幡画もまた持光寺本ほど詳細に描かれていないので、持光寺本のこの場面の主題を比定できる類似の表現は見当たらないのであるが、騎象の武将が三人も先導する持光寺本の表現は「朝賀」の記述よりも「麻耶夫人出遊」の光景に一致する点が多い。持光寺本のこの場面に近いと思われる常楽寺本第二幅下半部分も「麻耶夫人出遊」を描いたと解釈すると、「処胎……」と記す色紙形の題も第二幅とされる順位にも矛盾なく説明ができるであろう。以上のことから本稿(一)(31号)において「朝賀」と推定した持光寺本第一幅下半の主題を「麻耶夫人出遊」と改めることとする(資料二四)。

なお、大福田寺本、MOA美術館本、劔神社本、竜巖寺本においては「下天託胎」場面にある宮殿の門内に訪問した衣冠を整えた人物を描き、門外にはその人物の退出を待つ様子の車、門に至る路上には訪問して来

るらしい人物を配する。この場面こそ「朝賀」を描いたものと考えるところ

とができるであろう
(挿図1)。

次に第四幅(出家)

については、仏伝に

おいて「降魔」(持

光寺本第六幅)より後

方に位置する三迦葉

帰依に関する説話

「毒竜降伏」が紛ぎれ込んでいるが、仏伝の順からあまりに離れるので第四幅関係の文献資料に加えなかった。しかし、多くの経典に説かれた著名な説話であるから資料二五として追加した。諸経の記述はいずれも同じ内容を記し、この章句に拠り絵画化を試みるなら恐らく同じような絵画表現しか期待できないと思われる。説話は、毒竜がいるために誰も入れないでいる石室に釈迦が一夜の宿を借りる。竜は怒って火を吹くが、釈迦も神変を現わして身体から火を發して室内は猛火に満たされる。それを室外から見ていた迦葉は釈迦が焼死したと思うが、翌朝、釈迦は調伏した毒竜を入れた鉢を持って迦葉の前に現われ、迦葉はやがて釈迦に帰依したことを記す。画面中央上部に火焰を吹き合う人物と竜、右下には施無畏印を現わして坐る人物と礼拝する人物を描く。釈迦の右手後方の籠から蛇に似た動物が頭を出している。上部は石室における毒竜と釈迦との闘いであり、下部は翌朝に釈迦を拝する迦葉を描いたものである。これと同様な表現が久遠寺本(三幅)の中に見出せる。久遠寺本ではこの二場面を画面の左右の端に離して分け、同じ高さに描いて配置するが、その中間は虚空としている。

表1 釈迦八相図に描かれる主題一覧(○×印は表現の有無、/印は作品が伝わらないことを示す)

八相	順	主 題	所在	持光寺本	常楽寺本	竜巖寺本	劍神社寺	美術館本	久遠寺本	美術館本	根津	大福田寺本
下天	1	兜率天の宮	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	2	白象に坐る菩薩尊	×	○	○	○	○	○	×	×	×	×
	3	三眠る麻耶夫人	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
	4	占朝麻耶夫人出遊	○	○	○	○	○	○	×	×	×	×
託胎	5	誕生歩	○	○	○	○	○	○	×	×	×	×
	6	七獅子吼	○	○	○	○	○	○	×	×	×	×
	7	灌	○	○	○	○	○	○	×	×	×	×
	8	東門(老)	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×
降誕	9	南門(病)	○	○	○	○	○	○	×	×	×	×
	10	西門(死)	○	×	○	○	○	○	×	×	×	×
	11	北門(僧)	×	×	○	○	○	○	×	×	×	×
	12	? (生)	○?	×	×	×	×	×	×	×	×	×
四門出遊	13	三時殿遊楽	○	○	○	○	○	○	×	×	×	×
	14	習学	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○
	15	試芸(投象)	○	○	○	○	×	×	○	○	○	○
	16	試芸(相撲)	○	○	○	×	×	×	○	○	○	○
出家	17	試芸(射鼓)	○	○	○	○	○	○	×	×	×	×
	18	車匿を呼ぶ太子	○	×	×	×	×	×	○	○	○	○
	19	出城	○	○	○	○	○	○	×	×	×	×
	20	車匿との別れ	○	○	○	○	○	○	×	×	×	×
城	21	山中剃髪	○	○	×	×	×	×	×	○	○	×
	22	太子の髪を天へ	○	×	×	×	×	×	×	○	○	×
	23	獵師と着衣交換	○	×	×	×	×	×	×	○	○	×
	24	太子の衣を天へ運ぶ	○	×	×	×	×	×	×	○	○	×
城	25	山中を帰る車匿	○	×	×	×	×	×	×	○	○	×
	26	帰城した車匿	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×
	27	追尋太子	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×
	28	太子なき三時殿	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×
降魔	29	山中訪仙	○	×	○	○	×	×	×	○	○	×
	30	山中苦行	○	×	○	○	×	×	×	○	○	×
	31	尼連河沐浴、樹神	○	×	×	×	×	×	×	○	○	×
	32	吉祥草奉獻	×	×	×	○	○	○	○	×	×	×
法輪	33	降魔(魔女)	○	×	○	○	○	×	×	×	×	○
	34	二商主奉鉢	×	×	×	×	×	×	○	○	○	×
	35	四天王奉鉢	×	×	×	×	×	×	○	○	○	×
	36	初転法輪・成道	×	○	○	○	○	○	○	○	○	×
涅槃	37	毒竜降伏	○	×	×	×	×	×	○	○	○	×
	38	頻毘沙羅王帰依	○	○	×	×	×	×	○?	○	○	×
	39	須達長者鋪金	×	×	×	×	×	×	×	○	○	×
	40	牢度叉闍聖	○	○	×	×	×	×	×	○	○	×
涅槃	41	提婆達多投石	×	×	×	×	×	×	○	○	○	×
	42	猿奉蜜	×	×	×	×	×	×	○	○	○	×
	43	三寶	○	○	×	×	×	×	○	○	○	×
	44	涅槃	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
涅槃	45	涅槃	×	○	○	×	×	×	×	○	○	×
	46	荼毘	○	○	○	×	×	×	×	○	○	×
	47	荼毘	○	○	○	×	×	×	×	○	○	×
	48	分舎	○	○	○	×	×	×	×	○	○	×

久遠寺本は、この上方を須達長者鋪金を描き、この下方は四天王奉鉢をそれぞれ画面の幅一杯を使って表わす。持光寺本第四幅に「毒竜降伏」が混入した理由は不明である。

釈迦八相図の諸本に描かれる仏伝の各場面を、持光寺本に描かれる主題をもとに対比すると「表1」になる。主題に限って考えると、持光寺本は、同じ八幅本であったと推定される常楽寺本七幅とも主題の組合せ方は同じではない。MOA美術館本、劔神社本、竜巖寺本はほぼ同じ主題を組合せた一群であるが、持光寺本はこの一群とも異なっている。持光寺本と類似の組合せを示す作例を搜すと、持光寺本第四幅に対する根津美術館本（一幅）があるのみであり、現存の釈迦八相図の中には主題の組合せ方が同一の例は見出せず、各作例とも主題の組合せ方の細部は自由に取捨されていた様子が推察される。

三 構成と図様の特色

釈迦八相図に表わされる仏伝の中の各説話は、八幅一組に構成される持光寺本・常楽寺本と一幅に八相を描いてしまう大福田寺本とでは各説話を配置する画面構成に差異があるのは当然であるが、八相図の構成要素となる各説話には各場面を象徴するものとして不可欠の定型化した表現が、基本型として共通して存在する。釈迦八相図諸本の特色はこの基本型を如何に扱うか、すなわち基本型の細部に対する取捨の程度や新しく加える趣向に現われることになる。この節では持光寺本の各場面の表現と基本型との差異を中心に検討する。先ず、図様の検討から始める。釈迦八相の各場面の形式を検討するに先立ち各場面を描く画面の形と

大きさについて諸本と比較しておく。釈迦八相図を絵画作品として独立して描いた作例は、いずれも掛幅装で、本稿（一）（本誌317号）に記したように三重・大福田寺蔵釈迦八相成道図一幅（重文）、東京・根津美術館蔵釈迦八相図一幅（重文）、山梨・久遠寺蔵釈迦八相図三幅、静岡・MOA美術館蔵釈迦八相図四幅（重文）、滋賀・常楽寺蔵釈迦八相図七幅の五例が知られている。これらは皆、縦長の画面に描かれているのに対し、持光寺本だけは縦より横幅の方が僅かに大きくほぼ正方形であり、また、横幅約一二〇cmは他の諸本の場合より際立って大きい。建造物内部の壁面等に描かれた釈迦八相図の形式を彷彿とさせるものである。

なお、建造物の壁・扉に描かれた釈迦八相図としては、和歌山・浄妙寺多宝塔壁画、京都・浄瑠璃寺三重塔扉画の二例があるが、両者とも絵画部分の損傷が甚だしく、釈迦八相の中の主題の一部が僅かに残るのみで各場面の表現の全貌がうかがえない。釈迦八相図の各説話を描く細部の組立てを比較するに際しては、涅槃図の左右に仏伝を描いて一幅とした福井・劔神社蔵釈迦八相涅槃図一幅（重文）、鹿児島・竜巖寺蔵八相涅槃図一幅（重文）の二例が参考になり、さらに仏伝の場面を含む京都・清凉寺蔵釈迦堂縁起（伝元信筆、一五一五年、重文）や絵因果経諸本（国宝）が注目される。

縦長の掛幅装作例の中ではMOA美術館（旧称熱海美術館）本四幅の画面は特に細長く、幅三二・五cmで諸本の中では最も狭いが、高さはその三・五倍以上もある。そこに描かれた釈迦八相は、劔神社本・竜巖寺本の中の左右に縦に带状に描かれた八相の説話表現の形式に非常によく似る。劔神社本・竜巖寺本とも带状部分の幅は三二cm前後でMOA美術館

a 持光寺本

b 劔神社本

c 大福田寺本

挿図2 下天託胎

その他の作例は白象のみを描き、大福田寺本だけは白象も描かず雲に乗って飛来する三尊を来迎図のように描く(挿図2abc)。「託胎」に関連ある經典の大半が、白象が降下すると解釈できる訳文を載せる中で『過去現在因果経』巻第一(劉宋時代訳)と『仏説衆許摩訶帝経』巻第二(宋時代訳)は、ともに「菩薩乘六牙白象」と記し持光寺本の表現に一致する⁽⁴⁾。絵因果経は巻第一を描く場面が伝わらないので「託胎」が如何に絵画化されていたか不明である。しかし、「託胎」

本に近いので、この三者の間には密接な関連が考えられる。MOA美術館本は劔神社本の形式の带状部分のみを涅槃図から切離して独立させて釈迦八相図に仕立てた観がある。

一 第一幅(本誌317号図版ⅡⅢ)

第一幅は、画面を上下二区に分け、上半に「下天託胎」を、下半に「麻耶夫人出遊」と考えられる場面を描く。二つの主題とも画面の幅一杯を使い横長に表現する。釈迦八相図としては横幅の大きい画面の中に主題を二つしか描かず、さらに各主題の境界には檜霞を多用し、各場面の間隔が広いので画面全体が緊張感に乏しい構成となる。この傾向は八幅全部に共通して見られる。

持光寺本における「下天託胎」の形式上の特色は、兜率天宮を意味すると思われる楼閣を我々から見て画面右上隅に描いたこと、「託胎」の太子は白象に乗る菩薩の姿としたことである。諸経に記される「下天託胎」は、菩薩が白象と化して降下するものと菩薩が白象の背に乗って降りて来るものとの二種があることが早くから指摘されていたが、後者を絵画化した例は、現存する釈迦八相の中では持光寺本しか存在しない。

を白象に乗る菩薩の姿として描く例が清凉寺藏釈迦堂縁起(伝元信筆、一五一五年)第一巻にある。持光寺本の表背の修理銘の中には旧表具の修理銘を再録して「永徳三年五月三日再復云々」とあり、これを疑わなければ制作年代はこの少し前となる。釈迦縁起の同じ描写を考えると「下天託胎」表現が一つの系統を形成していたと考えられる。

画面下段は、向って左から右に向う華やかな行列の先頭の部分を画面の幅一杯に描く。この主題を本稿(一)では「朝賀」の列と推定したが、今回「麻耶夫人出遊」と解釈する方が妥当ではないかと考えた。行列は、象に乗り大旗を手で高く捧げる武将三騎を先頭に、白い巨象にひかれる大きな車が続き、その周囲を弓矢を持つ武人が数名従う。その後白馬にひかれる車が二台並び、更にその後の岩蔭になる道に二人の騎馬人物と六人の従者がついて来る。象や馬がひく車は、屋根に宝珠形を飾る葱花輦様の車で、背後に二本ずつ支柱を立てて三旒ずつの幡を下げ、徒歩で従う武人達は兜跋毘沙門天様の鎧や脛当を付ける。葱花輦様の輦車を象や馬に引かせた描写や武人の甲冑表現などは筆者が意図した

異国表現と考えることができよう。従者の武装はMOA美術館本や竜巖寺本に描かれており、奇異な表現ではないが、象馬人物の輪郭線部分には随所に補筆と思われる粗い墨線が認められる。特に人物の彩色も、彩色の上から描き起した衣褶線や輪郭線も粗く、馬車の輦車の屋根の橙色など輪郭線より外にはみ出ていることなどから、持光寺本は、画面全体が損傷を受け、当初の表現が損なわれるほど全面に修補されたのではないかと考えられる。象車、馬車、人物の彩色に赤、縁、紺、淡青、橙の各色が濃彩に施こされ、衣褶線や車輪の継ぎ目に細い金泥線が認められるが、人物を表わす輪郭線の鈍重さが、当初の部分をなぞった後補の表現であることを示しているといえるであろう。

二 第二幅（本誌317号図版IV a）

第二幅は、第一幅と同様に画面ほど中央で画面を上下に二分し、上半には「誕生」から「竜王灌水」に至る一連の説話を、下半には「四門出遊」を描く。

画面上半の太子誕生に関する場面は、画面の向って右半に藍毘尼園における誕生を描き、左へ進めて画面左半に、生まれてすぐ「七歩」歩いて足跡に蓮花が生じたこと、そこで「天上天下唯我為尊」と「獅子吼」したこと、その太子へ二竜王が清浄な水を灌いだ「二竜灌水」を描く。現存の釈迦八相図では「七歩・獅子吼・灌水」を一図にまとめて表現している。持光寺本も諸本と同じ場面を描く。資料に列挙した諸経は、いずれも太子が「七歩」歩いたと記し、中でも隋時代訳『仏本行集経』、唐時代訳『方广大莊嚴經』、宋時代訳『仏説衆許摩訶帝經』の三経は四方に七歩歩いたことを説く。⁽⁶⁾しかし、歩いたあとに蓮花が生じたことを

明記したものは『仏本行集経』と『方广大莊嚴經』のみであり、太子が東南西北の順に四方に七歩歩いたと記す『方广大莊嚴經』も蓮花が生じたことは最初の東方のときのみに記す。「七歩」に蓮花を記した資料はこのように少ないが、現存する釈迦八相図はいずれも太子の前に蓮花を一行に並べて描いており、この一句が絵画を描く側に鮮明な印象を与えていたことを窺わせる。太子は七歩あるいたのであるから七つ目の蓮花に立つと考えることが自然である。常楽寺本、MOA美術館本では太子の前に六個の蓮花が見える。劔神社本と竜巖寺本はこの部分が傷んでいて表現は明瞭ではないが、やはり六個の蓮花を数えることができる。六個以上描かれているとは認められない。蓮花は、諸本は大体蓮花座であるが、MOA美術館本は地中から生じた蓮茎を描く。持光寺本も蓮茎をも加えた蓮花を表現しており珍しい例と言えるが、そればかりか蓮花を明らかに八個も描いている。この描き方からは持光寺本の作者が經典の記述あるいは伝統的形式の細部の表現に従がわなかったことがうかがえる。

持光寺本は与えられた画面に対して登場人物が小さく、頭部が大きい可憐な人物に描くうえに諸本に比べて従者等の数が少ないので緊張感ある構成とはならない。持光寺本全体に共通する特色であるが地面の起伏をほとんど表現せず、淡青色の極くうすい地色に各場面を直接布置する点も全体の印象に大きくあずかっている。この場面を取囲み湧き上げる様々な色の雲を瑞雲として描く。この表現は他にはなく、持光寺本独自の着想と思われる。

画面下半は「四門出遊」を描く（図版VI）。本稿（一）の主題の項で触

部分
持光寺蔵

挿図3 釈迦八相図第二幅

京都 立本寺蔵

挿図4 法華經金字宝塔曼荼羅第二幅

石川 本土寺蔵

挿図5 観音經絵 部分

れたが、太子「降誕」に続けて「四門出遊」を描くことは例が少なく、

MOA美術館本が上半に「四門出遊」、下半に「降誕」を描いているのみである。一幅の中に八相を納める大福田寺本が「降誕」の左右に

「四門出遊」と「試芸」を分けて描いた場合は持光寺本の比較になり難いので別に考えるとして、常楽寺本第三幅は「降誕・試芸」により一幅を構成し、劔神社本・竜巖寺本は共に下から上に向けて降誕―試芸―四門出遊の順に描き進めている。諸経は、宋時代訳『仏本行経』のみが「試芸」の項を説かない他は、降誕―試芸―四門出遊の順に記述している。MOA美術館本は劔神社本・竜巖寺本と同系の作品と考えられているものであるから、MOA本に「試芸」場面が無いことは宋時代訳『仏本行経』に拠って描いたということではなく、「試芸」を省略したものと解釈できるであろう。MOA本は

全四幅で完結していると考えられるので「試芸」は描かれなかったことは確かである。従って、第三幅に「試芸・出城」を持つ持光寺本が、「四門出遊」を「試芸」より先に配置した構成は奇妙である。本図上半の蓮花の数の表現と四門出遊を試芸より先に描く配置とは、釈迦八相を熟知した人が持光寺本の制作を監督していなかったのではないかとの疑いを抱かせるものである。

ところで「四門出遊」表現は画面の幅を一杯に使い、第一幅の「麻耶夫人出遊」以上に力を込めて描く(図版VI)。四門出遊を説く諸経の中には『仏所行讃』、宋時代訳『仏説衆許摩訶帝経』、同『仏本行経』が四門の方位を記さずに老人・病人・死人の三人に会ったことを述べ、『衆許摩訶帝経』だけは更に沙門に太子が会うことを記す。その他の諸経は大半が東門を出て老人に、南門を出て病人に、西門を出て死人に、北門を出て沙門に会ったと説く。⁽⁷⁾持光寺本は白い築地屏に囲まれた建物に門を一つ付け、輦車を四台描いて四度出遊したことを表わそうとしている。画面下辺中央に白馬の馬車から二老人と相対し、画面下に小屋に臥す病を眺め、画面中央左側で葬送の列を見送る。

持光寺本の「四門出遊」に描く宮殿あるいは王宮は、四辺形の城壁の一边だけが見える視点から横長に描かれるが、この場面における諸本の王宮は城壁の手前の一边と向って左側の一边を描いた、左上方にのびる台形として描いている。従って、門外にいる太子の位置は、諸本は竜巖寺本のように前面、左側面、背後の城壁の向う側の三ヶ所に描くことが定型と思われるのに対して(図版VII)、持光寺本は独自に王宮の形を描いてしまったので門外の太子の位置も独自のものにならざるを得なかつ

たと考えられる。王宮の建物は諸本と同様で日本の寺院を見るような本殿、楼門、築地屏であるが、太子が輦車で出遊している点が持光寺独特の表現である。諸本では太子は馬に乗り、馬上から老人・病人・葬列を見ているのであるが、持光寺本は第一幅「麻耶夫人出遊」において象や馬がひく同型の車がこゝにも登場する。中央下辺に老人、左側中段に病人、その上方に葬列があり、太子の車以外は諸本に見られる老人、病人、葬列を描く。場面の境界は槍霞を豊富に用いる。ところが、画面右下隅に描かれる場面(挿図3)は、「四門出遊」の一つとして描いたものと思われるが、本稿(一)の主題の項で述べたように「四門出遊」の主題とは考えられない。このような表現は、諸本の中の「四門出遊」表現の中に見出せないのみならず、釈迦八相図の部分を探しても類似の表現は存在しない。持光寺本におけるこの部分は、老人・病人・葬列に会ったときの同じ輦車に乗った人物、従って太子と推定される人物が、車の中から建物の中に集まる四人ほどの人々を眺める場面であり、太子の車の背後には「降誕」の場面の背後に湧き上った雲と同じような雲が表わされる。「四門出遊」を四つとも描く場合に持光寺本に描かれているべき主題は、北門を出て沙門に会う場面である。しかし、こゝには沙門の姿はない。車に乗る太子の描写は他の三つと同じであり、やはり太子の出遊を表わすために付け加えられた描写であると考えられるので、この場面の主題を明らかにする鍵は右下隅の建物とその中の人々にある。現存する釈迦八相図以外の作品の中に類似の表現を求める必要があるろう。

太子が「四門出遊」において出会う老・病・死・沙門のうちの老・

病・死は、人間としては避けることのできない四苦すなわち生老病死苦の中の三つである。仏伝を説く諸経の中にも「四門出遊」の記述の近くに「生老病死」という語句は存在するが、⁽⁹⁾「四門出遊」に関しては文献、釈迦八相図とも「生」すなわち生まれることの苦相は表現していない。

『過去現在因果経』が説くように、太子の心に出家の決意を芽生えさせる手段として浄居天が老人以下に姿を変えて現われたことが「四門出遊」の意義であるから、四苦の中の「生」を浄居天が化現することは必要ではなかったと考えられる。生老病死苦の表現は、六道絵や法華経絵の中に見出せる。その中でも滋賀県・聖衆来迎寺蔵六道絵第九幅人道苦相(一)、奈良県・談山神社蔵妙法蓮華経金字宝塔曼荼羅第二幅譬喩品、京都府・立本寺蔵妙法蓮華経金字宝塔曼荼羅第二幅、石川県・本土寺蔵観音経絵には四苦の場面が明瞭であり(挿図4・5)、特に聖衆来迎寺の六道絵における葬列の表現は持光寺本「四門出遊」の左上場面の形式に酷似する。四苦の中の老病死苦は釈迦八相と法華経絵とも同じ主題ではあるが必ずしも同一の形には表わされていない。しかし、建物の縁先の部屋の中に女性を含む数人の人物をひと塊りに描く「生苦」の表現は、持光寺本第二幅右下隅の部分に通じるものである。持光寺本の筆者は、恐らく「四門出遊」において太子が目にした老病死僧を法華経絵にある生老病死苦の場面に置き換えたものと考えられる。「生苦」に立合う太子の車は背後に湧き雲に包まれ、太子誕生の場面に描かれた湧き雲と同じ意識によって表わされたと推測できる。「四門出遊」に「生苦」を表わすことを説く経典は存在しないので、持光寺本の表現は奇異の感じを抱かせる。そのうえ仏伝の中では太子出家を暗示させるものとして重

要な意味を持つ「四門出遊」北門の沙門に会う場面を持光寺本は省略しているから、やはり持光寺本の制作には伝統的な形式に細部まで忠実に従おうとする意識が稀薄であることは明らかであろう。

註

- (1) 本稿(一) 資料三。美術研究317号28頁下。
 - (2) 松本栄一『敦煌画の研究 図像篇』217-218頁、昭和12年。
 - (3) 小野玄妙『仏教之美術及歴史』第三篇第十章。
 - (4) 本誌317号、本稿(一) 資料参照。
 - (5) 本誌317号、本稿(一) 23頁上。
- 持光寺本第一幅表楷墨書修理銘
「八相成道曼陀羅八軸 右裏書永德三年五月三日再復云々
自余記錄依令破損不能記
二世安樂也願主住持存清 日輪山」
延宝三年九月廿五日奉修復万人□衆
- 本稿(一) においては住持「存世」と誤記したので「存清」と訂正する。
- (6) 資料五 獅子吼・灌水7・8・9 (本誌317号29頁上) 参照。
 - (7) 本誌317号28頁下-31頁上。「資料四、降誕・九、四門出遊」の項。
 - (8) 『仏本行集經』卷第十六(大正藏經3-127上)。

〔資料〕 — 補遺 — (本誌321号24頁上段につづく)

持光寺藏釈迦八相図に描かれた個々の主題について記述している章句を大正新修大藏經に納められた諸經の中から選び、主題ごとに列記する。經典名は、それを列挙した次の表の上に付けた洋数字によって省称する。引用資料の末尾に(3-493中)とあるのは、その資料が「大正大藏經第3卷493頁中段」にあることを示す。經典中の現在使われていない文字については、その一部を当用漢字で代用した。

- 1 後漢・竺大力共康孟詳訳『修行本起經』二卷
- 2 吳・支謙訳『仏説太子瑞応本起經』二卷
- 3 西晋・竺法護訳『仏説普曜經』八卷
- 4 西晋・聶道真訳『異出菩薩本起經』一卷
- 5 北凉・曇無讖訳『仏所行讚』五卷

- 6 劉宋・求那跋陀羅訳『過去現在因果經』四卷
- 7 隋・闍那崛多訳『仏本行集經』六十卷
- 8 唐・地婆訶羅訳『方广大莊嚴經』十二卷
- 9 宋・法賢訳『仏説衆許摩訶帝經』十三卷
- 10 劉宋・釈宝雲訳『仏本行經』七卷

二四 麻耶夫人出遊(三・朝賀につづく)

3 卷第二・欲生時三十二瑞品第五「王勅嚴駕及諸侍從。雲母宝車娑女圍繞。出行遊觀隣韓樹下。……二百白象前後導從。衆宝明珠垂珞諸象。象皆六牙。……懸諸繡幡。……眷属圍繞宿衛王后。……爾時王后象馬宝車。步人從者各八万四千。衆宝嚴飾兵仗嚴整。雄傑勇猛左右行前後圍繞。六万娑女前後導從。」(3-493中下)

6 卷第一「(王) 又勅嚴弁十万七宝車輦。一二車輦彫玩殊絶。又復勅外。嚴弁四軍。象兵馬兵車兵步兵。……王又勅諸群臣百官夫人去者。皆悉侍從。於是夫人。即昇宝輿。与諸官属并及娑女。前後導從。」(3-625上)

7 卷第七・樹下誕生品第六上「時淨飯王。弁具一万大力香象。皆被金鞍。七宝校飾。……備擬以送摩耶夫人。復一万善好良馬。……一切雜宝莊嚴其身。復有一万妙好宝車。並駕四馬。其車周匝張懸繡蓋及衆宝鈴。……皆隨摩耶夫人之後。復有二万勁勇力士。……身著鎧甲。手執弓箭。……随夫人後。復更別有一万宝車。十千妃嬪。……莊嚴其身。左右圍繞摩耶夫人。時淨飯王。重更切勅宮監大臣。好加防衛。」(3-685下)

8 卷第三・誕生品第七「時有八万四千象兵馬兵車兵步兵。……被以甲冑種種莊嚴。執持器仗護衛聖后。六万积種娑女翊從圍繞。王之眷属若長若幼恭敬護衛。」(3-552下)

二五 毒竜降伏(一九・降魔につづく)

2 卷下「仏即澡洗前入火室。……竜大忿怒。身皆火出。仏亦現神。身出火光。……於其室内。以道神力。滅竜毒。降伏竜身。化置鉢中。……明旦仏持鉢盛竜而出。迦葉驚喜問。……器中何等。仏答言。……是鉢中者。可言毒竜。衆人所畏。不敢入室者也。今者降之。」(3-481上)

図版要項

3 卷第八・十八變品第二十五「仏即澡洗前入火室。……。竜大瞋怒身皆火出。仏亦現神身出火光。……。仏……於内以道力降竜。……。竜即入鉢中。仏時置于鉢中。……。明且仏持鉢盛竜而出之。迦葉大喜。……。器中何等。仏言……竜是器中所言毒竜為害者也。今者降之已受降伏令受戒矣。」(3-531上)

5 卷第四・瓶沙王諸弟子品第十六「仏即入火室 端坐正思惟 時惡竜見仏瞋恚縱毒火 …… 舍尽火自滅 世尊猶安坐 …… 惡竜見世尊 …… 稽首而帰依 …… 迦葉及眷属 晨朝悉来看 仏已降惡竜 置在於鉢中」(4-31中下)

6 卷第四「入石室結加趺坐。而入三昧。爾時惡竜。毒心転生。拳体烟出。世尊即入火光三昧。竜見是已。火焰衝天。……。爾時世尊。身心不動。容顔怡然。降彼惡竜。使無復毒。授三帰依。置於鉢中。至天明已。迦葉師徒。俱往仏所。仏言。……。彼毒竜者。今在鉢中。即便拳鉢。以示迦葉。」(3-646中)

7 卷第四十・迦葉三兄弟品第四十四上「爾時彼堂毒竜。出外求覓食故。処処經歷。飽已廻還。遙見如来坐火堂内。……。即興毒害。口出烟炎。……。如来爾時亦入如是火光三昧。身出大火。仏及毒竜。各放猛火。」(3-841中下)

8 卷第十二・転法輪品第二十六之二「爾時如来洗手足已。前入石室敷座而坐。竜便瞋怒身中出煙。仏亦出煙。竜大瞋怒身中出火。仏亦出火。……。如来爾時以神通力。制伏毒竜置於鉢中。明且持鉢盛竜而出。……。仏告迦葉。我已伏之令受禁戒。」(3-611中下)

9 卷第九「時彼毒竜忽見世尊在舍中坐。即發瞋怒乃作煙霧遍舍内外。於是世尊以神通力亦化煙霧。毒竜転怒舍内火著。仏以神力亦化其火。……。世尊是時亦攝神力。毒竜降伏収於鉢内。……。仏又告言。汝言此舍有是毒竜人不敢止。我今降伏収於鉢中。汝可審觀了知其実。」(3-958中)

一 由原八幡宮縁起 下巻 部分(原色刷)
紙本着色 卷子装 竖三五・〇cm 全長一八七一・五cm 大分 杵原八幡宮蔵

二 同 上巻 部分

三 同 部分

竖三五・〇cm 全長一七八三・七cm

四 八幡大菩薩御縁起 下巻 部分
紙本着色 卷子装 竖二七・〇cm 全長八二三・二cm 大阪 逸翁美術館蔵

五 八幡大菩薩御縁起 部分
紙本着色 卷子装 竖一九・八cm 全長一四一二・八cm 米国 サンフランシスコ・アジア美術館蔵

一一五 宮次男「八幡大菩薩御縁起と八幡宮縁起」上」参照

六 釈迦八相図 第二幅 部分
絹本着色 掛幅装 竖一一三・九cm 横二二〇・四cm 広島 持光寺蔵

七 八相涅槃図 部分
絹本着色 掛幅装 竖二八九・〇cm 横二六四・七cm 鹿児島 竜巖寺蔵

六・七 関口正之「尾道市持光寺所蔵釈迦八相図について」四」参照

八 遊行上人縁起絵 巻七 第二段 大分 永福寺蔵

九 同 第五段

紙本着色 卷子装 竖三一・五cm 全長一四九七・六cm
八・九 宮次男「永福寺本遊行上人縁起絵」参照